

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 高橋 暦

### 論文題目

＜実現＞を表す視覚動詞「みる」の認知言語学的研究  
ーコーパスに基づくアプローチ

### 論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	堀江薫
委 員	名古屋大学准教授	奥田智樹
委 員	名古屋大学教授	初山洋介

## 論文審査の結果と要旨

### [論文の意義]

本博士論文は、認知言語学、特に構文文法 (Construction Grammar) と動的用法依拠モデル (Dynamic Usage-based Model) の観点から、日本語の視覚動詞「みる」が基本義である視覚行為の意味を大幅に希薄化させ、(1)のように「(物事が) 実現・成立する」といった意味を表す用法 (「<実現>の「みる」」) の記述・説明を提示することを目的とするものである。

(1) [エジプト・イスラエルの単独和平の合意だけ] が昨年 3 月から実施にうつされて進展をみているが……とくに [パレスチナ人民問題] は、ここ 10 か月間の交渉で何ら進展をみていず……

この「みる」は、上記の意味的特徴に加え、主語に非有生名詞が現れるという、他の知覚動詞にはみられない独特なふるまいを見せる。また、以下の (2) が示すように、<実現>という意味の発現も「みる」単独では表されず、主語名詞や目的語名詞との共起を前提としているという特徴が認められる。

(2) \*a. [エジプト・イスラエルの単独和平の合意だけが] Φ みているが…

\*b. [パレスチナ人民問題は] Φ みていず…

本博士論文では、このような「みる」に考察対象を限定し、当該の言語現象を多角的に記述することによって、言語現象の全容を解明し、日本語における視覚動詞研究の更なる発展に貢献することを目的に分析を行った。方法論的な特徴として、本博士論文は、実際の言語使用を重視するという立場から、共時的・通時的コーパスに基づく分析を行った。本研究がこれまでの研究と異なる点は、次の 2 点である。

(I) 節レベルで考察を行った点

(II) 通時的なアプローチを分析に導入した点

本博士論文の意義は、日本語の基本動詞の意味的な拡張の中でも非常に特異な現象である、「実現する」という基本動詞「みる」の意味拡張が生じるメカニズムを、認知言語学と通時的研究の観点から考究した点である。本研究は、日本語の基本動詞の「みる」の「実現する」という拡張義が節レベルの構文の一部として成立することを認知言語学の構文文法の観点から詳細に分析しており、今後の日本語の文法研究にも少なからぬインパクトを与えうる研究として高く評価できる。

### [論文の概要]

本博士論文の構成は、以下の通りである。

#### 第 1 章 序論

本博士論文は「一致をみる」「解決をみる」のように用いられる、日本語の視覚動詞「みる」に関する研究である。この「みる」は基本義 (視覚行為) を大幅に希薄化させ、「(物事が) 実現・成立

する」といった意味を表している。本博士論文では、これを「<実現>の「みる」と呼ぶ。<実現>の「みる」は上記の意味的特徴に加え、主語に非有生名詞が現れるという他の知覚動詞にはみられない独特なふるまいを見せる。また、<実現>という意味の発現は「みる」単独では表されず、主語名詞や目的語名詞との共起を前提としているという特徴も認められる。

本博士論文は、認知言語学 (cognitive linguistics)、なかでも、構文文法 (construction grammar)、動的用法依拠モデル (dynamic usage-based model) に立脚して分析を進めている。また、実際の言語使用を重視するという立場からコーパスを積極的に利用している。

## 第2章 先行研究

先行研究には、大きく2つの立場がある。(i) 多義動詞の意味として捉える研究 (田中 1996、高嶋 2008)、(ii) 機能動詞の意味として捉える研究 (村木 1983c, 1991、高橋 1994) である。これらの研究では主に、当該の言語現象における意味の側面や、目的語名詞と「みる」との共起に焦点が当てられ、当該の「みる」が表す非有生の主語名詞をはじめとする諸問題について、深く追求されてこなかった。そこで、本研究では、節レベルで考察を行うという先行研究にはない独自の視点で、考察を進めることとした (第3章)。また、同じく先行研究で行われてこなかった、通時的分析も行った (第4章)。

## 第3章 現代日本語における<実現>の「みる」の分析

第3章では、現代日本語における<実現>の「みる」の分析を行った。具体的には、まず、これまでの研究に残されていた問題の1つである構成要素 (主語名詞、目的語名詞、「みる」の3要素) に対する分析を行った。構文文法を前提に、本博士論文ではこれらの構成要素が一つの言語単位となり、<実現>の意味を発現すると主張している。本章では、また、<実現>という意味を表す「みる」が他の意味を表す「みる」と比較してどの程度出現するかといった頻度の問題や、<実現>の「みる」の使用域、<実現>を表す場合の「みる」がどの表記されるかといった問題についても分析を行った。本章ではまた、<実現>の「みる」の構文的特徴についても分析を行った。具体的には、<実現>の「みる」には主語名詞の表す<有生性>と、目的語名詞の<意図的関与性>のそれぞれの有無によって4つの共起関係が認められるとした。本研究では、これらの4つの関係はそれぞれが異なる意味と形式を持つ「構文」と捉えている。また、これに加え、4つの構文とは異なる発現要因をもつ構文も認められた。これらの5つの構文は相互に結びつき構文のネットワーク (network) を形成している。

## 第4章 成立期における<実現>の「みる」の分析

<実現>の「みる」は明治中期に誕生した構文である (『日本国語大辞典 (第二版)』)。そこで、本章では、「成立期における<実現>の「みる」の分析」として、構文の誕生期と成立期に当たる、明治大正期を中心とした分析を行った。具体的には、現代日本語と同様、構成要素の分析と表記の傾向を重点的に考察した。また、本章では、<実現>の「みる」という構文の創発に、近代期における日本語の欧米言語 (とりわけ、英語) との言語接触 (language contact) が大きく関わっていると推察し考察を進めた。本章では非有生の主語名詞の問題も、このような言語外的要因にその解決策を見出せると考える。しかし、また同時に、「みる」が語彙内部で<実現>の意味を創発させているという先行研究の主張 (田中 1996、高嶋 2008) も否定しがたい。そこで、本章では、<実現>の「みる」が誕生、定着するに至った過程には、メタファー、メトニミーといった言語内的要因の上に、欧米言語との言語接触という言語外的要因が積み重なった複合的な拡張メカニズムが作用している

と捉えた。また、同時期に発生した欧文脈の文体成立が〈実現〉の「みる」の定着を大きく後押ししたと考えた。この主張に対しては、〈実現〉の「みる」と欧文脈の表現構造との比較、また、〈実現〉の「みる」と英語動詞 *see, witness* との比較を論拠とした。これらの分析結果から、上記の主張に対し少なからずその可能性を示唆できたものとする。

## 第5章 結論

上記をまとめ結論を示すとともに、今後の課題と展望について述べた。

### [審査委員会による審議および合否判定]

口述試験では、申請者の方から博士論文の各章に関する説明が行われた後、審査委員からそれぞれに質疑応答が行われた。審査委員全員が、本研究がこれまで体系的に研究されてこなかった基本動詞「みる」の特異な意味拡張のメカニズムに対して認知言語学と通時研究を組み合わせ、これまでの伝統的な日本語の文法研究とは異なる新規な観点から接近し、新たな洞察を得ている点を高く評価する点では一致を見た。その上で内容、形式上分かりにくい点や誤記についての確認を含め質疑応答が行われた。主要な質疑の点は以下のとおりである。

- 1) 主語名詞・目的語名詞の4つの共起パターンとそれぞれの特徴の記述について、4つの共起パターンの違いが見えにくい。また、【C】パターンの認知図式は他動性の強い他動詞を示しており、〈実現〉の「みる」の説明になっていないのではないかと。
- 2) 従属節内に生起する〈実現〉の「みる」について、現象のみ説明されており、現象に対する要因の説明が必要ではないかと。

これらの問題点に対して口述試験の場及びその後の論文本体の修正を通じて以下の修正がなされ、審査委員がこれを確認して了解とした。

- 1') 全てのパターンに関し、改めて認知図式を提示した。
- 2') 要因の説明として、複文の主語の基本的性質から、従属節主語が主格で標示されない場合、従属節主語は主節主語と同一視されてしまうため、従属節内の〈実現〉の「みる」が [[名詞] + [状態変化名詞] + 「みる」] という単位で認識されなくなり、当該単位で発現していた〈実現〉の意味も発現できなくなる、と述べた。

全体として本論文は質量ともに博士後期課程の学位論文としての基準を十分に満たしていると審査委員会の全員一致で判断した。したがって、本論文を合格と判断した。